

第4回 伊丹市幼児教育ビジョン策定委員会

議 事 録

伊丹市幼児教育ビジョン策定委員会

平成 29 年度 第 4 回 伊丹市幼児教育ビジョン策定委員会

- 1 日 時 平成 30 年 2 月 20 日 (火) 15:00～
- 2 場 所 伊丹市総合教育センター 研修室
- 3 出席者 **【委員】**
出原委員、卜田委員、富岡委員、市川委員、伊藤委員、大西委員、
阿嘉委員、藤本委員、馬殿委員、谷口委員、林委員、細川委員
※大方委員、佐伯委員は欠席

【事務局】
木下教育長、
教育委員 江原委員、川畑委員、川崎委員
幼児教育施策推進班 村上参事、佐藤参事、谷澤参事、須磨副参事、
矢田主幹、大村主幹、樹山主査
学校指導課 廣重課長
- 4 傍聴者
- 5 次 第
 - 1 開会
 - 2 議事
 - (1) 議事録署名委員の指名
 - (2) 伊丹市幼児教育ビジョン (案) について
 - ・伊丹市の幼児期の子どもにおける「育てたい子ども像」
 - ・伊丹市幼児教育ビジョン (案) 全体について
 - 3 閉会

議 事 記 録

1 開会（省略）

2 議事

（1）議事録署名委員の指名

会 長： 本日の議事録にご署名をいただく方についてですが、名簿順にお願いさせていただくということで、馬殿委員と谷口委員にお願いしたいと思います。馬殿委員と谷口委員、よろしいでしょうか。

（2）伊丹市幼児教育ビジョン（案）について

会 長： 前回、「基本理念と育てたい子ども像」について議論をし、本日はその方向付けをしたい。基本理念の議論に付随し、幼児教育ビジョンは作成する目的について意見があり、最終的には、市が策定するビジョンであるため、市としての立場で示す目的であり、ビジョンがあることにより、市として実施する保育・幼児教育の施策に公共性を持たせることに繋がるということを確認したため、これらを前提に議論したい。

「育てたい子ども像」では、一人一人の子どもがどのように育つかという観点と同時に、周りとの関係の中、友だちとつながる、協働するという観点を示していく必要がある。「育てたい子ども像」に向かうため、必要なエッセンスとして「育てたい力」、どういう力を育てるのかを明確にする。幼児期だけでなく一生を見通す力、一人一人が自分の生活をする糧をつくる力、生きる力の源泉という言葉が出たことから、今だけでなく将来も見据えた議論が必要である。以前の委員会の議論であったが、乳幼児期の保育・教育が、認知能力の基になる学ぶ姿勢、人と協同する姿勢である非認知能力を育てるという議論があるため、これらも見通した議論をしたい。

会 長： これまでの議論を基に、素案を作成したため素案を基に議論する。

< 事務局より 伊丹市幼児教育ビジョン（案） に基づいて説明 >

会 長： 内容、全体の構成に関して質問や意見はいかがか。

F委員： 今後の進め方について、どのようになるのか。確認しておきたい。

事務局： 日程調整ができていく状況がある。紙面開催を予定している。しかし、時間帯なども検討していただけるなら開催したいと思う。

会 長： できれば、夜なども検討し、開催できるようにしたいと思う。

G委員： 4頁の「愛情」の項目についてだが、1月の臨時議会で数人の議員より、「愛情」についての質疑があり、すべての大人が安心して目の前の子どもに愛情を注ぐ環境を作ることにはすごく大切だと思うが、実際には、いじめや虐待、育児放棄など、そうならない場面も多い。このような中、愛情をかけたくても余裕の無い方もいると思うが、そういう人たちにプレッシャーを与える形にはならないのか。

会 長： 「愛情」という言葉の位置づけについては、根幹に関わる部分であるため議論したいが、いかがか。

J委員： 市としてのビジョンを示すことから、市には、いろいろな人がいることが大前提となる。その上で、この「すべて」という文言があるとすれば、子どもたちは大人の中で育つしかないため、子どもの周りにはいる大人たちに囲われる人もいれば、囲われない人も当然いるが、市として作成する場合には、全市あるいは市のいろいろな関係機関をあげてという主旨になる。当然、余裕の無い保護者もサポートしながら子育てしていくということが大前提にしている。

会 長： 「すべて」が「全員」と捉えられるならば、「様々な」でも良い。次の行にも「すべて」があるが、この行は、できる人ができる時にできることをしてということになっているので、一致しない。ここが「すべての」としているのは、保護者だけでなく社会全員で実施していくという社会の中で子どもを育てていくというメッセージになる。どういう文言にすれば、G委員が言う懸念に繋がらず、みんなで支え合っていこうという方向になるのか、ご提案ないか

H委員： 言葉の理解の仕方だと思う。頭の二つは、「環境を作りましょう」ということで、すべての人が「愛情」を持てる環境を作りましょうとっている。その上で、次に、できる人が整った環境の中において、できることをやりましょうということで、すべての大人に対し愛情をもって接しなさいという表現にはなっていない。この表現で問題ない。

会 長： 他にいかがか。

K委員： 「すべての大人が」というところだが、環境を作るのも大切だが、すべての大人が愛情を注ぐものである。ただ愛情を注ぎたくても出来ない家庭や環境はある。議員が何を言ったか不明だが、その環境作りは議員の仕事である。
これはビジョンであり、それに向かう方針であるため、「すべての大人が愛情を注ぐ」ということは必要。それと環境を整えることは別の話になる。

F委員： 「愛情」の説明文として、2つ目の「人は愛されて育つことにより自分を大切にすることができる。」という文章が先に来た方が分かりやすい。まず愛情に対する説明を行い、このようなことを挙げたのかという理由を示した後、「まちづくり」に移るほうが良い。

I委員： 1つ1つ、委員で意見を述べ、事務局で最後整理をお願いしたい。前に出たことと同じことを後で述べているところがある。また、使わないほうがよいという言葉もいくつかあるため、1頁ずつ確認し、整理したい。
また、この会は伊丹市の幼児教育ビジョンの主役は子どもであり、子どもは愛されて育つべきだということを、伊丹市は大事にしてきているという流れで議論を進めてきている。そのため、「愛情」という言葉を使うことは問題なく、「すべての大人が」という文言から、その環境を整備するためのあり方を多く盛り込めば、読む人も納得する。中には、その人の育った環境等いろいろなことから、どうしても子供を愛せない人もいるだろうが、それでも伊丹市は愛情

をもって子どもは守っていくべきだということを打ち出すべきだ。

会 長： 大きな柱3つ「愛情」「自然」「ことば」について確認し、その後、8頁以降の議論をし、最後に、「育てたい子ども像」に戻るとい進め方にしたい。

会 長： 「愛情」に関し、今の議論を集約する。

2つ目のセンテンスを先に示した後、1つ目のセンテンス「伊丹市はこれまでも、「お互いさま」で成り立つ人と人とのつながりを大切に」という流れにする。細かい文言調整をすれば、市としての取り組むビジョンであることが明確になる。いかがか。

I 委員： 「常にしがみつことができる」という言葉はふさわしくない。「寄り添ってくれる」などの表現が良い。「道具、植物や虫、動物」を整理する。動植物、次に物の順番が良い。「ふれあい」を強調するのであれば、「愛情」の中にも入れたほうがよい。

F 委員： 「そして」からの2行に関し、もう少し多様性に結びつくようなスムーズな文章にしたい。「ひととはよいものだ」というところから無理やり多様性に繋がっている。その下の3行も、I委員が言うような文章にしたほうが良い。

D 委員： 「よいものだ」という文言は良くない。「人とはすばらしい」と。ものではなく、すばらしいというニュアンスを出したい。

「人と人との愛情」、「自然への愛情」、「物への愛情」と、いろいろの愛情を区分しなければならぬが、根本である「人間性としての愛情」の中にすべて含まれている。その観点を含めると、「人とはすばらしい」、「愛情を持っているものである、人である」ということになる。

会 長： 「多様性」への繋がりに無理やり感があるということだが、いかがか。ありのままの自分が愛されるという経験があるから、多様性も認められるという関係性を大事にすることは良い。条件付きの愛情ではなく、良い子にしているからという愛情でもない。

J 委員： 内容ということより、「愛情」「自然」「ことば」を見たときに、文章が並んでいるためメリハリがない。D委員からの大前提の話や会長からの「ありのままを受け入れられる」というキーワードがあったときに、そのキーワードが目飛び込むように表現し、文章はそれほどいらぬ。キーワードが3つほどあり、その説明があるという流れと見え方にすればわかりやすく、すっきりする。

会 長： 実際には写真等を挿し込むと、もっとわかりやすい。

会 長： 5頁「自然」の項目ではどうか。「身近で豊かな自然と文化のふれ愛」について、いかがか。

D 委員： 「自然」には脅威の部分がある。脅威の部分から畏敬の念が出る。「自然」に対する尊敬というより畏敬という言い方のほうが、先祖から受け継ぎ、自然に対する感謝や、命の育みの大切さなど、本当に真摯な気持ちを持っているとい

う観点で、言葉を使うとよい。

I 委員： 指針や教育要領に、「畏敬の念をもつ」という表現があるように、負の体験となる自然の怖さも、子どもが生きる上で大切である。例えば、今回の大雪もすべて自然であり、美しいものばかりではなく人間の命に関わるようなことがある。それらをきちんと学び、生きる力を育てていく。かつては山が崩れる匂いを人は感じ取っていた。今は、そのような場所に近づけない状況にし、危険回避能力を身に付けず育つ。伊丹市が自然と共生関係を謳うならば、畏敬の念という言葉を使ったほうが良い。

また、「学べる昆虫館」で、「学べる」には抵抗がある。新しく改訂される指針も、学びに向かっていくイメージ図がどんどん書かれているが、人を愛することも学びと捉えれば学びになる。今回、指針や教育要領に盛り込まれていない「愛」を、伊丹市でわざわざ強調している。昆虫の名前を覚えることよりも、「昆虫に親しめる」とかいう言葉を使ったほうがよい。

全般に、一般市民は、「学び」と聞けば、学力を高めるため、賢い子を育てるためにはまず遊ばせ、遊ばせることにより勉強する子になると受け取りがちである。勉強する人が人生を豊かに生きるかといえば、様々な生き方があり、学力だけが生きる力のすべてではない。「学び」という言葉を使うときは慎重になるほうがよい。

会 長： 「学び」の前提に、おもしろい、好きだからというところがなければならない。「遊びを通して」という箇所、再度、丁寧に抑える必要がある。好きだからこそ育っていく力がある。

H 委員： 3頁で最初に言ったことだが、自然を大切にするような気持ち、心を育てるような感じで捉えたが、5頁では見当たらない。「自然」に対し、「自然を大切にすることもある」ということもあれば、「自然から学ぶ」ということもある。整理していくつかにまとめたほうがよい。

会 長： 「自然」は、いくつくらいのキーワードに分けるのが良いか。

I 委員： 「自然にふれる」という中で、よく自然にふれて命という部分にフォーカスを置きがち。命というキーワードをあげると、必ず生き物、植物が先で、石など命の無い物が後になってしまう。しかし、土にも命があり生きているため、五感を使う体験、植物、動物に触れるということは、その中で豊かな感情、好奇心、思考力、表現力等が育つため、キーワードをどのように揚げれば良いのか。「命」をキーワードとしてあげるならば、その意味をしっかりと書く必要がある。また、「ひとは自然の一員だ」という立ち位置をどこかに標記して、そこから繋げていかなければ、「自然」が薄い感じがする。もう少し整理が必要。

J 委員： 1つに、「自然に対する畏敬の念」はとても大事なキーワード。もう1つは、「親しむ」という観点で、触れたときに出てくる心の揺れ動きである。そして、「自然の面白さ、美しさ、不思議さ」というところから、「豊かな感情、好奇心、思考力」がある。一番大事なのは、「自分も自然の一員である」ということを最終、気づかせる流れはいかがか。それが全体としては、「学び」という言葉を出さなくても、そういうニュアンスであることが伝わる。

会 長： かなりすっきりとした感じがする。お許しいただけるなら、学識2名と相談しながら、整理し、次回示すことで良いか。

会 長： 6頁「ことば」について、キーワードも含めいかがか。

F委員： キーワードではないが、「乳児期の子どもは」という3行と、「乳児期の子どもに」という行を入れ替えた方がよい。

「時には」からの文章で、「素話」は身近ではない。もう少しわかりやすい言葉があればよい。

I委員： 保育の専門的というか、「お話」で良いのではないか。

「0歳の赤ちゃんから」とあるが、これは生まれる前からということか。言葉を選んだ方がよい。

伊丹市の「ことば」に対する説明を聞いた時に、「薫習（くんじゅう）」という言葉をごだわって使っていることが素晴らしいと思った。伊丹市の特色であるため、「薫習」を入れるか入れないかはともかく、「薫習」のことを表現しているということを文章化してほしい。

J委員： まずは、乳幼児期の子どもにとって大切なことは、1つ目に、例えば、周りの大人やあるいは、絵本、歌を通してとか、というようなところから、「語りかけられる」「歌いかけられる」ということである。次に、その内容については、下から3つ目の、「豊かで、美しく、あたたかなことば」と関わる。そして、最後に、「自分で表現する」ということになる。この3つの視点がこの部分で表現されている。

会 長： 「ことば」の持つ役割、その育ちという観点で整理できた。例えば、「薫習」、「素話」をいう言葉をあえて使い、伊丹市としてごだわりたいということであれば、その言葉をあえて使うことも良い。「素話」という言葉自体が共有されなくなってきたが、かなり大事で、「素話」という言葉自体を入れたほうが良い。

I委員： 「薫習」を敢えて入れて欲しい。伊丹市はまち全体で「ことば」に触れ、それが心になるというところを表わせればよい。

H委員： ことばを話せない子どもの文章が半分以上を占めている。「ことば」を通じてという中には、コミュニケーションがベースにあると思う。そういうものに対しての項目も必要ではないか。

会 長： つながるとか、伝わりとかなどになるか。

H委員： ふれあいで繋がるというキーワードがでていいる。「つながる」とはポイントとポイントのイメージがあるため、面として「広がる」のほうが良い。どちらにしても、単に個体としての成長ではなく、全体で広がって、お互いにやりとりができるということを基本とし、言葉・コミュニケーションで能力を身に付けてほしい。

会 長： 「広がる」という形がでました。例えば、言葉を持たない人や子ども、日本語で会話ができない人であっても、気持ちが伝わる方法は、ことばの1つの役割だと思ったので、その辺りも踏まえながら、「広がる」なのか、キーワードを整理していきたい。
他にいかがか。今の案を再構築していきたい。

会 長： 8頁以降はいかがか。
まず、「遊びを通して学ぶ 子どもたち」という部分で、具体的な事例や説明を入れるほうがよいとの議論があったが、いかがか。

F委員： 例えば、「鬼ごっこ」という遊びには、こういった学びの要素を含んでいるというような説明がわかりやすいのではないか。追いかけるのに、使う筋肉や、距離感をつかむ目的がある等、書くとわかるようになるが、表現方法が難しい。

B委員： 職員同士で学び合う場では、遊んでいる姿を写真に撮り、子どものつぶやきを載せながら、その姿から、このような育ちがありこうなりましたという勉強会をする。しかし、保護者には、どのようにすれば、その遊びから育ちがあるのかを具体的に示した方がわかりやすい。具体的な話があったほうがまとめやすい。

E委員： ここの中に盛り込むことが良い事なのかわからないが、小学校教員が幼稚園で遊ぶ子どもを見ても、その遊びの中に含まれていることが、小学校での生活のどのようなことにつながっているのかなどわかるような書き方でもいいのかと考える。その遊びの要素がわかれば、小学校、中学校、あるいは小さな子どもを持たない人でもこんなつながりがあるのかなと少しわかる。

A委員： 「学ぶ」という言葉で誤解が生じるかもしれないが、一つは小学校の学習に直接的につながる、「知識の面での学び」、子ども達の「遊び」の中には、何度やってもうまくいかないが、毎日少しずつ積み重ねれば、自分にもできるという学びをする場合もあれば、「遊び」を通して友達の中には様々な考え方の人がいるということも学ぶ。「人間関係的なこと」「自分自身のこと」等の学び。このビジョンに書くときに、学習、知識的なものに偏らないように、両面を表現していく方がよい。人としての育ち、豊かな子どもを育てようということでビジョンをたてるのであれば、そういう部分が必要だと思う。

L委員： イメージとしては、「愛情」「自然」「ことば」を育むための遊びとか、このような遊びが「愛情」につながるとかになる。科学的根拠となると難しいが、「愛情」を育むために、このような「遊び」があるということがあっても良い。このような遊びをすると、このような効果があるなどがわかると、遊び方が変わるのでは。

D委員： このビジョンは市としての提示であるということでまとめていくことになるが、保護者にわかりやすくする、保護者がどのようにすれば、自分の子どもをうまく教育、保育できるのか、その保障を市として行うということが、スタートの文言に入っていたと思う。「愛情」を注げる環境を整えることが大切になる

ため、「愛情」を注ぐとは、具体的にどのような行動をとれば良いのか、具体例として出てくる。例えば、保護者は公園デビューで、他児との関わり方について悩む。幼児教育の専門家は、発達における遊びの段階を知っているという前提があるが、保護者は感覚としてわかっている、その知識がない。そのため、他児と関わりはどのように進んでいくのか、その中で「遊び」がどのように関係しているのかを客観的に示す必要がある。次に、「ことば」が思考の手段になるため、そのことを提示することも大切である。自然に、日本の文化の中で培われてきている愛情のある語りかけというものも少しわかりやすくすることで、保護者の保育・教育も環境として担保しているということ言えば良い。

会 長： 自然に実践していることを意味付けていくということになる。他にいかがか。

J 委員： 「遊び」にはどのような視点があるのか。身体的、成長発達というのが1つある。もう1つは見えない、内面的な育ち、発達がある。目に見える形として、言葉の獲得は非常にわかりやすい。目に見える部分と目に見えない部分という2つの分け方でもよい。そのようなことが、3つのキーワードとどのように絡むのかを示すとわかりやすいとの意見もあったが、健やかな育ちのベースには、まず、「愛情」がある。そこから、「自然」と関わることにより、目に見える部分と目に見えない部分の両方の部分でどのような育ちがあるのかということを示してもよい。あるいは、「ことば」という部分も両面を提示する。「薫習」がとても良い言葉だと思うのは、教育はいつ花開くのか全くわからない。「薫習」はしみついていくということであるため、すぐに表現はできなくても、ある時何かあるきっかけで、ぐっと花開くかもしれない。しかし、「薫習」がなければ花開くことはない。教育は期待というより子どもに対する願いである。「薫習」しているということが非常に大事であり、その「薫習」を支えるために「愛情」があり、その部分には目に見える部分と目に見えない部分があり、おおよその育ちとしてはこのようなことがあるという形でいかがか。

I 委員： 9頁の「学ぶ」という言葉は避けられないかもしれないので、知育偏重にならないということをどこかに入れておくことと、文章には「一人一人の子どもが好きで、やりたいことがあり、集中したり没頭したりして真剣に遊ぶこと」とある。主体性を育むとか主体的という文言をどこかに入れておく。子どもに何かを与えて遊ばせたらいいのではない。子どもが本当に自らやってみたいとなるようなところを強調すると良い。

会 長： 次に10頁から12頁ではいかがか。

「質の高い幼児教育」というところで、「質の高い」ということをどう捉えるのか。「質の高い」イコールより高度な事をしてると誤解されがちである。「質の高い教育」ということがあふれているので、ここでいう質の高いとはこういうことなんだと明記するか。

F 委員： 「立派なことができるようになること、難しいことができるようになることではなく、一人一人の子どもが大切にされ、「愛情」「自然」「ことば」を柱とした幼児教育を充実することであり」とあるので、ここでいう質の高い幼児教育の説明では、「愛情」「自然」「ことば」を柱とした幼児教育を充実することが質

の高い幼児教育という説明になる。このことを柔らかい表現で説明するということか。

E委員： 質の高い幼児教育を目指すとのなかで、(1)と、(2)から(6)までの内容が違う。どちらかという、(1)は遊びを通して学ぶ子ども達の、より具体的内容であり、その後に連携などで(2)以降がでてくるのか。質の高い幼児教育をめざしてとするよりは、(1)を前に持っていき、「質の高い幼児教育」よりは、「関係機関と連携して」のほうが読みやすい。

会 長： 基本的に、3の部分は、伊丹市としての取り組みである。(1)が若干あいまいな部分はある、目標なのか施策なのかという難しさかもしれない。サブタイトルの、「伊丹市として取り組むこと」があれば、何をするのがはっきりわかる。

H委員： 7頁のところで、初めに育てたい子ども像や力があって、「遊びを通して学ぶ子どもたち」は、一般市民にはわかってもらえない。それを知ってもらうため、「育てたい子ども像」「育てたい力」があるから、この時期の子どもは遊ぶことで育つということで、単に内容を知ってもらうのではなくて、10頁の(1)「豊かな遊びと体験の充実」を前のほうにまとめてしまうことによりつながる。これからの幼児教育を良くするためには、(2)から(6)を考えないといけない。要は子どもとは別の世界、バックアップするところとは切って整理すればよいのではないか。

会 長： そのあたりで整理できると思う。(1)で、遊びを充実させるために環境を整備する内容はありますが、それ以外のことは前に出し、環境整備のためにこういう取り組みをするということを記載する。遊び場の議論もこれまでであったので、それらも含めて取り組むということで、集約して記載していく。

B委員： 「3 質の高い幼児教育をめざして」の、2行目に「0歳児から就学するまでの乳幼児期の子どもの成長は」とあるが、乳児の部分で、新しい保育指針でも養護と教育が一体となってこそという文言がある。ビジョンにはどこにも出てこず、最初に「一人一人の子どもが大切にされて」とあるが、3番のこの部分で養護の関わりが見えてこない。

また、「保育者の資質向上」でも、専門知識や技術習得のために研修を行う等とよく書かれているが、自己研鑽しなければならないことは多い。「高い倫理観に裏付けされた」とあるが、このようなものは集団研修では中々身に付かない。道徳性や倫理観は、個別の自己研鑽による。質の高い幼児教育のための保育者の資質向上は、専門的な知識を研修で得ることと、倫理観や道徳性、豊かな人間性を培うために各々がすべきことが両輪となる必要がある。どこまで打ち出せるかどうかはわからないが、乳児にとって、養護と教育が一体となっている幼児教育とは、保護と教育が一体となってこそだということを示さなければならず、少し文言に出すべき。先の学びがここにきてぱっきり切られた様になる。

会 長： 乳児、養護の視点で、関わる保育者の倫理観や姿勢をどのようにさせるのか。「愛情」のところでも、「子どもに関わるすべての大人」という文言があり、当然保育者も入るため、研修体制や保育者の育成なども記述するべきである。

会 長： 「質の高い」はいかがか。敢えて残し、ただその質とは何かを整理していくことでよいか。

K委員： 「質の高い幼児教育」というところだが、(1)を除いた(2)から(6)の内容は、「質の高い幼児教育」より「幼児教育の充実」のほうが分かり良い。(2)から(6)を行うことで質が上がるのか。当たり前の事である。その内容をもっと深堀りし、いろいろな形があると。質が高いという表現より、幼児教育の充実にはなっていると思う。市民も理解しにくいのではないか。

会 長： 中核になる保育実践に関しての記述を(1)にある程度集約しようとしているが、その部分がやや不明確と感じられる。それを取り巻く周りの部分が(4)は違うとしても、(2)から(6)に関しては保育実践を取り巻く状況の整理になる。

J委員： キーワードが「愛情」「自然」「ことば」であるため、「質の高い」より、伊丹市が大切にしたい幼児教育ということから、「愛情」「自然」「ことば」という視点でまとめることもできる。それを支えるため、(2)以降の取り組みを、さらに充実させるという書き方になる。

また、養護の視点はとても大事な視点であり、「愛情」にかかわる部分である。「愛情」をもって養護の部分を支えた上で教育につながる。押えるべきことは押さえ、その上で、さらに伊丹市はその部分に特化していくという表現の仕方がある。今の内容は、様々な事を万遍なく押さえていこうという内容となっている。

会 長： 3つの柱になった部分を踏まえ、「質の高い」ということをどのように決めていくのか。また、そこに入らないが、大切にしていきたいことという形で整理するというものもある。項目のたてかたそのものもあるが、軸をどうするかということである。

K委員： 「質の高い幼児教育をめざして」という項目で行くのであれば、内容が変わる。「質の高い幼児教育」からは、カリキュラム等にまずいってしまう。質の高い幼児教育という文言であれば、少し(2)から(6)の内容を変える必要があり、あるいは(7)が必要なかもしれない。カリキュラム等だけでないのであれば、「質の高い」という文言は少しあわない。

会 長： 「質の高い」という文言を使い、少しポイントを変えるのか、「伊丹市の取り組みとして大切にしていきたいこと」という文言で、取り組み内容としてこの内容が大事になるため、このように整理していくのか。市が取り組みを支えていくということであれば、どちらが妥当なのかということがわかる。

市として、取り組むための根拠として考えたときに、足すものもあれば、「質の高い」という表現をすると、市民に対し説明するという部分が多くなる。ただ、具体的に大事にすること、研修の機会を設ける、支援をしていきますということ表現していくのであれば、その視点で整理し、かつ足さなければならないことも出てくる。

G委員： (2)から(6)は当たり前である。当たり前だが、実践することが難しい

とも思う。小学校への接続や個別支援、保護者支援、地域のつながりは、すごく大切に目指すことは良いが、今よりさらに充実していくとか、実践することはすごく難しい。今でも保護者から見れば、もう少し充実してほしいことが多い中、「質の高い」と言われてもわからなかったりするため、「伊丹の取り組み」として、これから目指すことを記載するほうが、保護者は伊丹が向かう方向性がわかり期待もできる。

K委員： 当たり前は少し語弊があるが、(2)から(6)ができてないのであれば、質が低いので、充実のほうが合う。

会 長： 「幼児教育の充実をめざして」というタイトルで、サブタイトルとして「伊丹市として取り組むこと」にする。その中でたした方がいいのではという意見について、次の書面開催で提案いただくこととする。
参考資料等については、いかがか。

H委員： 参考資料ではないが、11、12頁で、3番の項目だが、いただいたデータでは特別支援に関する記載だが、データを見るまでつながらなかった。健常の子ども達の中で個性を大事にするということを述べていると思った。特別支援を意識するという項目であるなら、考えなければいけない。
また、「地域とのつながり」の項目で、「いただいています」みたいな文言を考え直す必要がある。

D委員： 根本の問題に戻るが、今回は市としてビジョンを出していくという方向性だが、市としては幼児教育の基本理念として「愛情」「自然」「ことば」を中心として行う。基本となる「愛情」「自然」「ことば」というキーワードとして出し、その内容を進めることにより質が高くなるということを具体的に述べる必要がある。

会 長： 特に、「自然」「ことば」は、具体的にもう少し取り組みを整理したい。

会 長： 3頁に戻る。キーワードについて、事務局案では「いきいき たくましく みらいへ」、「豊かなふれ愛でつながる幼児教育」としているが、いかがか。

H委員： 「みらいへ」の前に「大きな」という言葉を入れてはどうか。「つながる」より「広がる」のほうが良い。

D委員： 「大きなみらいへ」だと、量と質と両方ある。「すばらしいみらいへ」とか「しあわせなみらいへ」とかという言葉もいかがか。

F委員： 「いきいき たくましく みらいへ」が「いたみ」にかかっていると知らず、全然関係ないのを考えた。「愛情」「自然」「ことば」にかかると良いと思い、「みんな だいすき すくすく たくましく」はいかがか。「愛情」であれば「みんな だいすき」、「いきいき」より「すくすく」にした。

会 長： 「たくましく」という言葉が気になる。「愛情」やいろんな個性との触れ合いとなると、「たくましさ」より、「しなやかさ」ではないか。「しなやか」という

言葉は折れそうで折れない。しかし、様々な人と沿うというイメージがある。いかがか。

A委員： その下のサブタイトル「つながる」という提案だが、みんなでこれを進めていこうということであるなら、「つなげる」「ひろげる」がよい。

会 長： 「ひろげる」が良い。「豊かなふれ愛でひろげる幼児教育」。サブタイトルは決まった気がする。

I委員： 「愛情」「自然」「ことば」につなげる必要がある。3つのキーワードが既にあるため、その3つがあがっていても良い。それをうまく表現できればよい。

また、「幼児教育において大切にしたいこと3つ」という言葉は乱暴。「伊丹市の」「伊丹市において」が文頭に必要である。「愛情」「自然」「ことば」は要領等の基本にあり、その中から伊丹は、この3つのキーワードを出してきている。ビジョン案としてわかりにくい。結局何が言いたいのか、薄くなり、もったいない。伊丹市は、「愛情」「自然」「ことば」で保育していく訳ではないので、ここは伊丹市の特徴であると抜き出したキーワードであると考えて3つを出した。

会 長： (1)を整理する。様々な形の中で伊丹市はこの3つにこだわり取り組むということを表現できるようにする。

キャッチフレーズに戻るが、「愛情」「自然」「ことば」をどのように活かすか。

K委員： この3つが盛り込まれているのが、「豊かなふれ愛」ではないか。サブタイトルをキャッチフレーズにすればよいのではないか。

会 長： 「豊かなふれ愛でひろげる幼児教育」の前に、「愛情」「自然」「ことば」という言葉を入れ、「豊かなふれ愛でひろげる幼児教育」をキャッチフレーズにする方法もある。

I委員： 「豊かなふれ愛でひろげる幼児教育」のキャッチフレーズの下に、「愛情」「自然」「ことば」を後ろに入れればどうか。

会 長： この形で一度整理し議論することでよいか。

会 長： 7頁だが、一貫した視点で整理する必要があるという議論がある。「愛情」「自然」「ことば」という3つの姿が「育てたい子ども像」に何らかの形で反映させる必要がある。「育てたい子ども像」は、いくつかの項目が出てくる。その上で、「育てたい力」で、具体的にどのようにしていくのか。一度事務局と相談し案を出したい。

D委員： 「育てたい力」で、波線の中にあるが、語尾に「力」とあるものとそうでないものがある。バラバラであるので、統一する方がいいのでは。

会 長： 「力」という文言でまとめる。力というと、個人の力に集約されがちなため、意識しながら、関係を育てていく、つながりを育てていくということをどのように位置付けるのか難しくなるが、整理が必要である。5回目の書面開催、6回

目の日程調整、夜も含めて行う方向で進めていきたい。

D委員： 1頁だが、グローバル化・AI・Iot とあるが、人とのかかわり、つながりを大事にしていくテクノロジーでいえば、ICTははずせない。コミュニケーションテクノロジーがこれからどんどん発展していくであろうことから、その部分にICTを入れてほしい。

F委員： 続きで、「子どもたちが、このような時代をたくましく生き抜いていくためには、こんな能力を育んでいかなければなりません。」という文章は、「育てたい力」にも続くようなものにしたい。

会 長： 今日は細部まで整理した。これを基に次回、意見をいただく。

3 閉会（省略）